
ぼくの所属は文学部

せんとくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくの所属は文学部

【Nコード】

N0146U

【作者名】

せんとくん

【あらすじ】

大学の文学部に通うぼくが書き綴るエッセイ。エッセイっていったらエッセイ。正直エッセイがどういうものかわからないけど、誰が何と言ってもこれはエッセイなのだ。誰がなんとも言わなくてもこれはエッセイなのだ。エッセイ、エッセイ。エッセイがゲシュタルト崩壊してきたエッセイ。エッセイ。

はつきりいうとこの作品のテーマはありふれたテーマ——「暇つぶし」です。

皆様、お初にお目にかかります。

それがし、せんとくと申すもの、本日はこのような駄文をご閲覧いただき、誠に恐悦至極、感謝の極みでござる……

・

つかみはこんなところでいいだろうか。さて、察しのいい方はもうお気づきだとは思いますが、ぼくは文を書くことがあまり得意ではない。「今日の講義の感想を書け」と言われて「今日のこうぎはとてもためになりました。これからやくだてていこうと思います」と小学生にも、指をさされて、ばかめばかめフハハハ、と笑われてしまうような文章を書いてしまうようなヤツである。小説を書く、など土台無理な話なのだ。

「タイトルに文学部所属って書いてあるじゃあないですか。それなのに文才ゼロとか何考えてるんですかエツ！　そこらへんはどうお考えになつているんですかエツ！」と詰め寄られたならば謝るよりほかはない。本当にごめんなさい。

ただ、文学部だからといって、みんながみんな寝る間も惜しんで小説を読んだり、書いたり、「いや〜やっぱり太宰の小説にはこう、社会への絶望というか、反骨精神というか、ネガティブな思考というか、そんなものが露骨に出ている、なんというか、こう、現代の社会にビッグでダイレクトでスピリチュアルな警報を発信しているわけですな、うん」とかいう議論を熱心に繰り広げているわけではないというご理解いただきたい。というかこんなことしてる人々は生まれてこの方、一度も見たことがない。(まあ、こんなことは他人の目の前でするようなことじゃないから、当然といえば当然だが)

結局のところ、ぼくのレベルでは「太宰つて絶対に中二病だよなwwww」などのたまつて、友人とともにバカ笑いをする程度が限界なのである。

そんなこんなで、ぼくは軽く危機感を覚えつつあるのだ。だってそうでしょう、文学部にいて文が書けないなんて無能と言うほかない。まるで足の遅いチーター、体脂肪率50パーセントのゴリラのようなものではないか。もっとも、ゴリラの体脂肪率がどれくらいかなんて知っているはずがないが。もしかしたらゴリラは、「肥満はステータスウホ！ 希少価値ウホ！」なんて言っているかもしれないが、知ったこつちゃあない。

話がそれだが、まあ、一つぐらいは人並以上のモノがなければだめじゃない？と考えたわけで、せっかく文学部にいるんだからいちよなんか書いてみるか、とこんなよくわからない文章をよくわからないノリで書き始めた次第である。

ここまで読んでくれた方々、本当にありがとう。この作品はこれからダラダラ続けていこうと思っているので機会があれば見に来ていただきたい。

執筆は継続する、、クオリティも守る。ぼくごときが両方やると言っつのはかな

悲しくなった。ネタがない。

普通は18年も生きていれば、それなりに人生経験もあって、それなりに小説のネタになるような記憶も持っているのだろう。しかし悲しいかな、ぼくのババロアに少しシワの入った程度の脳みそをいくら引っ掻き回しても、使えそうな情報はちつとも出てこないのだ。

よく小説家たちが自分がネタを持っていないことを自虐ネタに使ったりするが、連載2回目にしてこの手法を使わざるを得ないという状況は前代未聞、言語道断の事態であろう。つくづくぼくの人生の薄っぺらさを実感する。

仕方がないので、ぼく自身のことと、その周りの環境について少し書いてみようと思う。ぼくはこの春晴れて大学生となった。身長は180センチと無駄にデカく、体重は85キロとこれまたやたらと重い。健康診断では体重過多と言われた。肥満ではない、体重過多なのだ。肥満ではないのだ。性別はもちろん男である。

そして所属はタイトルにもあるように文学部。決して、「大物小説家に俺はなる!!!」どん!!!」だとか、「文学界の神になる」みたいな大それた志を持って入ったわけではない。ただ入れそうなく所に入っただけなのだ。「事情があつて、文学部に入りたいけど入れなかった」というような人たちには申し訳ないが、これがぼくの現状である。

さて、文学部は女子が多いというイメージがある人もいるだろう。例として多くのクラスの男女比をあげる。

男子：女子＝1：9

おわかりだろうか。女子が多いなんてレベルじゃない。クラスが

50人で男子は5人しかいないのだ。もちろん学校によっていくらか差はあるだろうが、文学部に所属する人間は圧倒的、絶対的に女子が多いのだろう。

ぼくの友人で経済学部に行ったヤツがいて、そいつは「ハーレムじゃん。すぐに彼女できるなwww」なんてほざいていたが、だまされたまね。女子とまともにコミュニケーションをとれない人種にとつてこの状況がいかにも苦しいものかわかっていないようである。

余談だが、こいつ大学に入って携帯のアドレス帳の登録人数が100人増えたらしい。「友達100人できるかな」の体現者である。なにこのリア充爆発しろ。

さらに余談だが、こいつ大学に入って1週間後にはもう合コンをしたらしい。もうこのリア充爆発しろ。はじめて混ぜられ。

ちなみに、ぼくは彼女いない歴〃年齢で記録は今も更新中である。まわりは女子ばかりだが彼女ができる気配はない。全くない。これでもかというほどない。いとかなし。

この文章スタイルがおバカさんみてエーだとオ？

この文章のジャンルはエッセイでいいのだろうか？自分で決めておいて、少々不安になってきた。

このサイトに登録されているエッセイのジャンルに分類されている小説を拝見したところ、こんなどうしようもなくおバカな疑問がわいてきてしまったのである。

ざっと見た限り、みなさん何やら立派なことを書いていらっしやる。環境問題について、戦争について、文の書き方についてなど、なにやら崇高かつ、教育的かつ、啓発的なテーマの文章ばかりではないか。ぼくみたいにネタがないとか、彼女ほしいとか、リア充爆発しろ！とかかわめいている作品は少なくともランキング上位には見当たらない。

もしかしたら、エッセイとは存在自体が崇高なジャンルで、ぼくごときがふざけ半分で書いていいものではなかったのではあるまいか。広辞苑でエッセイの意味を調べたところ、こう書いてあった。

・ 随筆。自由な形式で書かれた、思索性をもつ散文。ですって。ようするに、なんでも書いていいぞい、ということらしい。つまり、この駄文もエッセイでいいぞい、ということであるようだ。よかった、よかった。

さて今日のテーマは、歴史の教科書と、「魔法少女まどか マギカ」のキュウベエとの類似性についてである。

「頭にウジでも湧いてしまったのですか？あなた」という疑問ができるのももつともであるが、まあお聞きになってください。

今日受けた講義に「近代日本の歴史」というものがある。この講義の方針は端的に言えば、「お前のふざけた常識をぶち壊す！」といったぐあいものだ。いままで「常識」として考えていた出来事

や言葉も、少しばかり違う角度から見ると、ボロボロと矛盾や疑問が出てきてヒジョーにおもしろい。毎回、この講義を受けると、目からウロコが落ちる。

今日の講義では、一万円のオツチャンこと福沢諭吉が話題に上がった。彼の「学問のすゝめ」という本の冒頭の言葉「天は人の上に人を造らず」というフレーズを一度は聞いたことがあるだろう。小中学校の教科書にものっているはずだ。

大多数の人のイメージは「諭吉のオツチャンは、人類みな平等を謳ったエライ人なんやなあ」みたいな感じであろう。

ところがぎつちゃん、こやつそのあとに続けてこんなことを書いておるのだ。

「されども、今広くこの人間界を見渡すに、かしこきひとあり、おろかなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人もありて、その有様雲と泥の相違あるに似たるは何ぞや」

少し長くなってしまったが、つまるところ人間の価値の違いは天と地ほどの開きがあると言っているのだ。さらにこの後にはこんな一文がある。

「すべて心を用い心配する仕事はむつかしくて、手足を用いる力役はやすし。故に、医者、学者、政府の役人、または大なる商売をする町人、あまたの奉公人を召し使う大百姓などは身分重くして尊き者というべし」

またまた長くなってしまったが、要約すると、「肉体労働してる人より頭使って仕事してる人がエライ！」ということだ。バリバリ差別宣言をしている。

諭吉サンはおそらく、冒頭の文章を「確かに」である。しかし「といった具合に、単なる話すキツカケとして用いたのだろうか。」

問題はどの教科書も冒頭の一部しかのせていないということである。これでは福沢諭吉のイメージは人類平等宣言をした人、としか認識されない。彼の主張は正反対のことであるに関わらずである。

いくらなんでも問題あるんじゃないだろうか。

ここでふとあるキャラクターが浮かんだ。「魔法少女まどかギカ」というアニメのマスコットキャラクター、キュウベエである。アニメオタクの弟から聞いたこいつの行動はまさに外道と呼ぶべきものであった。

コイツは少女たちに「魔法少女になれば願いが一つかなう」といつてすり寄り、魔法少女にしてしまう。実際は魔法少女になるとハシパナイデメリットがあるらしいのだが、コイツはそんなこと一言も言わず、都合のいい話だけを並べて契約を交わしてしまうそう。後で問い詰めても、「きかれなかったから言わなかったただだよ」「などとほざくらしい。トコトン外道である。

ここで、歴史の教科書も、キュウベエと同じように、「自分にとって都合のいい一部分だけを取り上げる」ということをしているということに気付いたのであった。だからなんだ、といわれても、おバかなぼくは、なんだかなあとしか言えないのでありますね。

WWW

すると、護衛の騎士が俺に絡んできた。

「無礼者！ 姫様に向かってなんとという不敬！ だいたいあんな魔物私ひとりでも、、、」

「フツ、、、他人に嫌われるのは慣れている、、、」

「ま、まあ、さっきは助かった、、ありがとう／／」

「テンプレ通りのツンデレ乙WWWでもお前野郎ですからWWW
WWWほお染めても萌えませんからWWWサーセンWWW」

その時突然、俺の右腕が強く疼きだした。俺は左手で必死に押さえつける。

「この感覚は、、、ヤツが来る!!」

激しい光が当たりを染めた次の瞬間、ロン毛のイケメンが俺たちの前に立っていた。

「久方ぶりだな。わが半身」

「お前は、、、二年前、父と母と妹と隣に住んでいた山田を連れ去っていった暗黒魔法使い、イレイザー!! 俺はお前を倒すために旅に出た、、、!!」

「山田とばつちりWWW不憫すぎるWWW」

俺はコイツを倒すために、毎日腕立て伏せと腹筋をこなしてきた。

今日こそ仇を討つ!!!

「くらえ!!!
アイン・アーツ 第壹技、フォイエブレード 灼熱業炎刃!!!」

「ちょｗｗｗｗドイツ語と英語ごちゃ混ぜｗｗｗｗテラチャン
ブルーｗｗｗｗ」

ガキンツ!!!

「なん、、、だと、、、」

「たいした奴だ、、、しかしそのような攻撃など効かぬわ!!!
死ね!!!」

ドカーン!!!

「ウボオアアーーーー!!!」

「オワタ＼(＾o＾)／」

ドクン

俺の中で何かが目覚めた。俺は死の危険が迫ると第二の人格が目覚める特異体質だったのだ!!!

「グオオオオオオオオオオ!!!」

「バカな!!!なんだこの力は!!!」

「ガッシ! ボカツ!」ラスボスは死んだ。 スイーツ(笑)

だって、広辞苑サンがエッセイは自由に書いていいって言ったからつい、、、、、、

書いていて楽しかった。反省はしている。

ボールペン ドイツ語でクーゲルシュライバー

消しゴム 英語でイレイザー

文房具カッコよすぎワロタwwwwww

虫歯というものは、なんとも厄介でありますね。最近右の奥歯がジクジクと痛む。どうやら小学生時代以来、7年ぶりに虫歯になってしまったようだ。忘れかけていたイヤーな記憶がよみがえってくる。

虫歯の原因はミュータンス菌というヤツらしい。コノヤロウ。痛みので言葉が乱れてしまった。申し訳ない。しかしまあ、なぜコイツらはこんなにも陰湿かつ、効果的な攻撃を仕掛けてくるのだろうか。朝、昼、晩、コイツらは一切の休憩もなしに、ひたすらぼくの歯をチマチマといじめ抜く。一体ぼくが何をしたというのだ。生まれてこの方、ミュータンス菌に恨まれるようなことは何一つした覚えがないというのに。コンチクショウ。またまた言葉が乱れてしまった。申し訳ない。

何といつてもタチが悪いのは、虫歯は自然に治らないということであろう。頭痛とか腹痛は、放っておけば治ることもあるだろうが、虫歯は放置すれば悪化する一方である。歯医者に虫歯を削ってもらうか、引っこ抜いてもらうかしなければ、痛みから解放されることはないのだ。

しかも、この削ったり、引っこ抜いたりといった治療は、言うまでもなく非常にオソロシイものである。歯医者のドリルとはなんであんなに細くてせこくていやらしいのだろうか。ドリルは夢と希望に満ち溢れた男のロマンではなかったのか。ゲッター2とかサンダーバードとかグレンラガンとかのカッコいいイメージとはあまりにかけ離れた歯医者のドリルは、ある意味で最凶の武器のように思われる。どんなに屈強な男でも、あの「キューイーン」というまがまがしい回転音を聞けば、へびににらまれたカエルのように萎縮して

しまつたらう。

そもそも、なんでコイツらミュータンス菌は好き好んで人の口の中に住み着くのだらうか？確かに栄養分はほかのところ比べれば多いだらう。人間はいろんなものを食うからほかの菌にくらべるとずいぶんイイモンを食べているのかもしれない。だが人の口の中、というのは住処にするにはとてつもなく都合の悪い場所のように思える。

たとえば、ぼくたちは朝起きたら普通はうがいをするでしょう。そのたびに口の中は大洪水である。間違いなく菌たちは大損害をうけるだらう。次に朝食を食べる。栄養が入ってくるのは菌たちにとつてありがたいかもしれないが、口の中はこれでもかというぐらいに動きまくる。菌たちにとっては地震なんて目じゃない、天変地異レベルの災害だらう。食後に熱いコーヒーでも流し込まれたら熱による損害も受けてさらに悲惨な目にあうと思われる。そして、食後の歯磨き。今までの無意識のうちの殺戮とは違い、ミュータンス菌に対して、明確な攻撃意思を持った人間による大量虐殺。歯ブラシによる物理的な攻撃と、歯磨き粉による科学的な殺菌のダブルパンチ。一体全体の何割が生き残ることができるのだらうか。こんな致死率ほぼ100パーセントの場所を住処にするとは、物好きなヤツらである。

もし、ミュータンス菌とコミュニケーションが取れば、もつと安全かつ快適な住処を提供して、ぼくの口内から速やかに退場していただくのだが。科学が発達した現代でも、菌と会話できるようになったなんて話は聞かない。どうやらぼくは、最凶の武器を携えた白い医者あくまが待つ病院へ行く覚悟を決めないといけならしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0146u/>

ぼくの所属は文学部

2011年10月9日09時01分発行